■同じ“牛”を見ても

先に私は「人は言葉で物を見てゐる」といふことを述べた。そこで、ここに一頭の牛がゐると仮定しよう。私たち日本は、「あゝ“牛”がゐるな」といふやうに“言葉”を使ってそれを見る。つまり、私たちは、日本語の“牛”といふ言葉を使ってこれを見てゐるのである。

ところが、アメリカ人やイギリス人だと、これを「英語を使って見る」のであるから、その牛がcowかbullかoxか、そのいづれであるかを先づ見定めて、それから「oxがゐる」とか、「cowがゐる」とか、と思ふのに違ひない。

更に言ふならば、oxといふ言葉は、それが一頭の時に限って使ふ言葉であって、二頭以上ゐる時にはoxenといふ言葉を使はなければならないのである。

それ故に、日本語の“牛”のやうに、性や数に全く関係の無い言葉を有たないアメリカ人やイギリス人は、牛を見る時には、必ず、「牡(おす)かな、それとも牝(めす)かな」と考へ、更に、「何頭ゐるか」までを観察しないわけには行かないのではないだらうか。

いづれにせよ、私たち日本人が見る時に思ふやうな「あゝ、“牛”がゐる」といふ、性や数に全く関はりの無い、単純な見方は、さういふ言葉が無い以上、いくらしたいと思っても出来ないのではないだらうか、と私は思ふのである。

■松虫かな、鈴虫かな

“牛”の場合、アメリカ人やイギリス人に比べて非常に単純な見方をする私たち日本人も、秋の鳴く虫となると決してさうでは無い。「リーン、リーンと鳴く“鈴虫”かな。それとも、チンチロリンと鳴く“松虫”かな」といふ細かな見方をするのである。

“牛”では細かな見方をする欧米人だが、鳴く虫となると細かな見方が出来ないのである。なぜかと言ふと、日本人なら誰でも知って使ってゐる“鈴虫”や“松虫”“蟋蟀(こほろぎ)”を表す言葉が、欧米人の生活用語の中に存在してゐないからである。だから、これらの虫は皆、同じ物としてしか見えないのである。